

学位論文要旨

学位論文題目： 苗族社会における刺繍と社会関係をめぐる文化人類学的研究

— 1950年代以降の中国貴州省黔东南州雷山县西江村を中心として—

申請者氏名： 楊 梅竹

本論は急激な社会的変化の中で、中国西南地域の貴州省黔东南雷山家の苗族の刺繍をめぐり、繡を糸・紋様・技法・色彩など細かい観点から分析しはじめ、手工製・機械製の比較の中で製作の時間に注目し、さらに、現地の人々の視点を重視し、刺繍の作り手である女性だけでなく、親族、近隣、観光客、男性、研究者などの多様なアクターとの関係から刺繍の価値及び位置づけを究明し、刺繍・人間・社会がどのように繋がっているのかについて探究したものである。

本論では時間軸を設定し、1950年代以降（聞き取り調査できる範囲）の時代背景の変遷により、刺繍そのもの、及び刺繍に関わる人間・社会の変容を見ていき、苗族社会を事例として刺繍文化及び社会組織に関する研究を行い、それを学術成果として公開することで、急激な開発政策下にある手工芸文化の変容過程を描き出すことにある。さらに、社会変容の中に苗族の人はいかにモノである刺繍をとおして文化資本と社会関係資本を確認しているのかを明らかにする。

本論は序章と終章を除いて合計5章からなる。それぞれの章の内容については以下のようにまとめる。

第1章では、刺繍の素材である糸に注目し、機械製作の刺繍品と手工製作の刺繍品を比較する中で、糸の切り目と結び目、刺繍糸の揃っている程度、刺繍糸の色彩構成などが異なっていることを示した。そして、手工製作の刺繍品は対称的に見える紋様の中に一部だけ非対称な所があり、一部だけ刺繍品全体の色使いのルールを異にする部分があるというような特徴があることを明らかにした。このような特徴は刺繍製作過程における刺繍糸の手持ちの残量、また針に通している糸の残りの長さによって生じ、人間が糸を操り刺繍を作るが、逆に糸も人間の意識や行動に影響を与え、刺繍紋様の色彩構成を変更させるという状況を明らかにした。刺繍製作は、刺繍糸と刺繍製作者の間の共同作業であり（たとえば糸の状況により紋様の色が変わり、市販の糸の種類と展示方法が刺繍の色彩構成に影響を与える）、いずれもが主体となり客体となり得る相互作用の中で作品が作られることを示した。

第2章では、刺繍技法の伝承に着目し、現在苗族刺繍の技法は母娘伝承、同時代の女性による伝承、刺繍教室による伝承の3つの伝承方式があることを明らかにした。これまでの先行研究では母娘伝承が強く主張されたために、一緒に刺繍をする「小群体」で行われるような同時代女性による伝承・継承が見落とされてきた。女性のライ

フステージの変化に伴い、その女性が刺繍伝承および刺繍継承において果たしている役割が変わるため、刺繍技法の伝承・継承という意味において、母娘の共有する時間は限られているためであり、婚出後における同時代女性間でなされる交流の方が技法の習得という意味ではより重要であることを示した。従来重視されてきた母から娘へと伝承されることを肯定した上で、母娘伝承を同時代に生活している女性（母系に属する親族、姉妹、女性の友人、同じ地域に居住する女性など）による伝承の一部であることを再配置した。

第3章では、ジェンダーの観点から、苗族の刺繍する女性はもちろん、刺繍をしない男性が刺繍とどのような関係を持っているかを明らかにした。これまで苗族の刺繍についての多くの研究によって、刺繍が女性によって育まれてきた文化であることは定説であった。1990年代の出稼ぎブームや、道路の建設、観光化などにより、若い年齢層が村を出て、農業用の畑や水田が減少し、苗族の村の生業形態が変わり、生活様式も変化した。このような時代背景において、刺繍における主役は女性であることには変わりはないが、潜在化していた男性と刺繍との関係が顕在化するようになってきた。

男性と刺繍との関係について、刺繍の完成前（製作過程）と完成後（販売、使用）に分けて整理した。刺繍の完成までに、すなわち刺繍の製作過程において男性が刺繍の紋様を描き、男性が家事や農作業をして女性の刺繍時間を確保し、女性が刺繍をすることに男性が反対しないといった消極的な支持している。また完成後の刺繍と男性の関係については、刺繍をどのように使用するのかという面から、すなわち、製作者本人（女性）の使用、次世代への相続用、販売用という3つの面から論じた。次世代へ相続用の刺繍品に関する検討では調査データが不足であるが、宋Hや李WFなどの事例で本来母娘の間でしか行われてこなかった晴れ着であるウーベイ・コーテェイの譲渡において、息子を介しての「未来の嫁」への譲渡が可能であることが確認された。

特に刺繍品が商品化したことにより、販売や提供されるサービスに付加価値をつけるため、男性が時間、煩勞、努力をとわず、シャドーワークをしている。しかし、これは公表されず、男性も収入を得ていない。この点から考えれば、男性が刺繍の経済において、ある程度「不可視」化されていることを示した。

第4章では、これまで衣装が民族識別や民族アイデンティティを表すと位置づけられてきたが、本論では刺繍をつけている民族衣装の位置づけを結婚式で衣装を展示する場から再考した。まずは、西江苗族女性の日常的着用するウーゲンと非日常的に着用するウーベイ・コーテェイを紹介し、衣装の製作者、着用場、製作方式などについて述べた。次に、結婚式における衣装の果たす役割について、衣装が新婦にとって自身を装飾するだけでなく、新婦の社会関係資本を展示し、新婦が刺繍製作出来るか否かによって、嫁ぎ先の女性に認めてもらい、刺繍製作する「小群体」に入る重要な媒

介物でもあることを示した。最後に、1950年代前の女性は結婚式の後に坐家という衣装製作の期間があったが、1960年代、1970年代の社会的動乱期と経済的な環境により坐家をしなくなり、さらに1980年代以降は学校教育の影響で坐家が復活できなかったことを事例を通して明らかにした。

まとめて言えば、1980年代以前は刺繍をとおして苗族女性の文化資本と社会関係資本を確認していたが、1980年代以降学校教育や出稼ぎの影響で刺繍技術の習得者が激減し、刺繍で文化資本を確認することができなくなる一方、技術所有者が技術の持たない娘のためにウーベイ・コーテエイとウーゲンを手工製作することになり、刺繍を通して苗族女性の社会関係資本を確認することが重要視されるようになった。

第5章では、観光化により急激な社会変化に直面している苗族社会の刺繍品販売を事例に、刺繍品をめぐる2つの交換の在り方、そして先行研究では触れられていない現代の苗族社会における刺繍が市場経済の衝撃の中において果たしている役割について明らかにした。刺繍品販売店を営んでいる苗族女性を事例に、現地の人に向けては刺繍品の贈与交換をしていることが、外部の人である観光客に向けては刺繍品の取引交換をしているという明確な違いを明らかにした。すなわち、本章では苗族女性が刺繍品の交換において、対内（贈与・無償貸与）と対外（取引）によって異なる態度をとっており、さらに対内的な交換においては親疎関係によって交換する範囲が異なることを示した。

本研究は刺繍が物質として活躍し、社会関係を構築・再構築する媒介であることについて論じた。このような社会関係の構築・再構築は変動しつつある社会と分離することはできない。社会の変容に伴い、刺繍の製作、用途、価値なども変化している。すなわち、刺繍のあり方は社会の変容に適応するものであることを明らかにした。

本論では苗族社会における刺繍と人間の双方向的な視点に立ち、モノ（刺繍）とヒト（苗族社会の人間・苗族社会以外の人間）の相互関係を検討した。刺繍を製作する素材である刺繍糸の特性により、刺繍の色彩構成が変わる。また、苗族社会において、糸の繰り返しにより作り上げた刺繍以上に時間がかかるものがないため、西江苗族社会の刺繍する女性にとって刺繍は時間を表すモノである。というのは刺繍を手工製作するには多大な時間が必要である。1980年代以前刺繍技術者である苗族女性は時間をかけて刺繍を製作することで文化資本と社会関係資本を確認していたが、その後、社会環境や経済的環境の変化で、刺繍技術者が激減し、刺繍が文化資本としての役割が弱化するのに対して、技術革新や市場経済の中で既製の刺繍品が販売されるような状況においても時間をかけて刺繍を製作してくれる人がいるという社会関係資本を示す役割が重要視されるようになった。すなわち、苗族女性は手工製作の刺繍の技法と紋様よりも刺繍にかかった時間を優先に考えるのは、糸の繰り返しにより縫い付け

た刺繍が多大な時間がかかるという物質性があり、文化資本として刺繍が衰退するよ
うな状況において、本論ではモノとしての刺繍は時間を示せるという物質性から、社
会関係資本を確認できることを示した。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 132号	氏 名	楊 梅竹
論文題目	苗族社会における刺繍と社会関係をめぐる文化人類学的研究 —1950年代以降の中国貴州省黔东南州雷山县西江村を中心として—		
(論文審査概要)			
<p>博士論文は序章と終章を含む7章で構成されている。研究対象は一貫しており、1950年代以降の中国貴州省における苗族社会の刺繍製作(糸を含む)、またそれに係る社会集団について議論している。本論文は、これまでの苗族の刺繍をめぐる研究の限界を示したうえで、近年の文化人類学的研究で活発になっているモノ論から、苗族の刺繍、ひいては特定の社会集団内における手工芸品と社会関係について新たな視座を提供している。</p> <p>序章と終章を除く各章の概要は以下の通りである。第1章：糸からの苗族刺繍研究では、苗族刺繍における糸に着目し、糸の残量が刺繍製作者の構想、完成品に大きな影響力を持っていることを指摘する。加えて、機械製作の刺繍ではほとんど見られない、左右が非対称の刺繍の存在の重要性を指摘する。糸の状態、既製品としての糸の普及、市場における糸の変化などを通して、苗族社会における刺繍と糸の関係性を明らかにしている。</p> <p>第2章：苗族刺繍の母系伝承について(技法を中心に)。これまで苗族の晴れ着は母娘間で保管され、基本的に母系をたどって継承されていることが指摘されてきた。また同時に、刺繍技法も母娘および母系を通して継承されるということが定説であった。しかし、複数の調査事例から、継承される刺繍技法を整理し、母娘間で継承される技法は、彼女らが習得する刺繍技法の一部に過ぎず、より高度な刺繍技法は、婚姻後、夫型居住をしたうえで、嫁ぎ先の女性たち(小群体)から習得することが多いことを指摘した。これによって刺繍技法という観点から見れば、決して苗族の刺繍は母娘間のみで継承されているのではないことが明らかとなった。</p> <p>第3章：苗族の刺繍に関するジェンダー観では、苗族刺繍の担い手である女性を研究対象とする議論が多い中、苗族女性の刺繍製作を可能にしている男性の活動をシャドーワークとして論じたものである。銀細工を製作する男性の役割や、各時代における刺繍製作者としての女性と男性の関係、そして現在の苗族社会における男性と刺繍の係り方に関して論じられている。これらの検討を通して、男性が積極的・消極的に女性の作業時間を確保することが、苗族の刺繍製作を可能にしていることが示された。</p> <p>第4章：苗族女性の婚姻における衣装の再考では、苗族社会における婚姻時の苗族衣装の展示について論じられている。苗族は婚姻時に新婦が新郎側の村において、刺繍作品を展示する機会があるが、そこでは女性の文化資本(刺繍を製作できること)、社会関係資本(刺繍を教えてくれる人の存在、刺繍を共に手伝って製作してくれる人の存在、刺繍が施された衣装を貸与してくれる人の存在)が示される。事例の中では、手作りの刺繍を展示する新婦と機械製作の刺繍を展示する新婦とが対比的に描かれるが、これらの事例を通して、婚姻時の衣装展示の場というのが、新婦がどのような社会関係資本を有しているのかが示される場であることが明らかになる。</p> <p>第5章：苗族社会の財である刺繍と衣装の交換では、苗族の晴れ着の貸与から財としての衣装のあり方を考察している。苗族の晴れ着は、複数の製作者が少しずつ手分けして製作を行っても、完成に2年~3年の歳月を要する。そのため衣装の貸与も限られている。機械製の衣装であれば、観光客に貸与することもあるが、手工製のものが観光客に貸与されることは非常に少ない。そのため、親族、友人、知人、観光客などを対象に、苗族の晴れ着を通してどのような交換関係が成立しているかを明らかにした。その結果、衣装の貸与に明らかな親疎関係が見られ、交換も市場交換と贈与交換という2パターンが親疎関係を軸として明確に現れる結果となった。</p>			

論文の序章と終章では、これまでの先行研究の限界点を提示した上で、近年、文化人類学の研究領域で議論が活発になっている対称性的人类学という観点から、苗族の刺繍研究に新たな観点を提示している。また終章において、改めて苗族の晴れ着の文化資本としての側面と社会関係資本としての側面が強調され、モノ論という観点から苗族社会における刺繍と社会関係をめぐる文化人類学的研究の意義が示されている。

以上の内容から、審査委員会は本論を以下の要件を十分に満たし、達成したものとする。

1. 創造性：20世紀以降の文化人類学的研究の系譜を丁寧に整理した上で、本研究課題の意義を提示し、先行研究の限界を示したうえで、厚い記述に基づく多くの事例から、苗族の刺繍研究に対して独自の視点を提示し、社会関係資本としての刺繍という新たな観点・意義を示している。
2. 論理性：本論は先行研究の整理、提示の仕方、論証において適切な手続きがなされており、審査委員会および外部審査委員は議論の展開のあり方に問題がないと判断している。
3. 厳格性：先行研究が十分に渉猟されており、オリジナルのデータに関しても適切に提示されている。予備審査の際に指摘があった、用語の統一、概念の整理、IPAを用いた現地語表記についても適切な対処がなされている。
4. 発展性：本研究は文化人類学におけるモノ論に影響される部分が少なくなかった。モノ論とは、20世紀後半から、B. ラトゥールや M. セールなどによって牽引されてきた議論である。ヒトとモノとを同等のアクターとして捉え、さまざまな社会・文化的事象を考察する議論である。しかし、認識論的立場からの反論も少なくなく、これは未だに定説として定着しているとはいえない。本研究は、予備審査の段階では、ANTやモノ論に大きく依拠していたが、本審査においては修正を加えたうえで、モノ論的議論の展開を留保しつつ、苗族社会と刺繍製作に関して、適切な「距離」をとった上で議論をまとめることができた。このような意味において、本研究課題は非常に挑戦的な側面も有しており、今後も大いに発展する可能性を有したものと言える。

以上より、本研究課題「苗族社会における刺繍と社会関係をめぐる文化人類学的研究」は十分に達成されており、2020年3月に発表される博士論文として同時代性においても高く評価できる。

論文審査結果

合・否

審査委員

(氏名) 高橋 紅仁

(氏名) 谷部 真吾

(氏名) 馬 彰

(氏名) 横田 尚俊

(氏名) 小林 亮至